

『観心本尊抄』三箇銘文説と『開目抄』との関係について

三 浦 和 浩

一、はじめに

『観心本尊抄』（文永十年・真蹟存）には、次のような記述がある。

其本尊為レ体本師ノ娑婆ノ上ニ宝塔居レ空ニ塔中妙法蓮華經左右ニ釈迦牟尼佛多宝佛釈尊ノ脇土ハ上行等ノ四菩薩文殊
弥勒等四菩薩ハ眷属トシテ居ニ末座ニ迹化・他方大小諸菩薩万民ノ処ニ大地ニ如レ見ルガ雲閣月卿ヲ。十方ノ諸佛ハ処ニシテマ
大地ノ上ニ。表ニスルガ迹佛迹土ヲ故也。如レ是ニ本尊ニ在世五十余年ニ無レ之。八年之間但限ニ八品ニ

（『定本遺文』七二二頁）

この箇所は、日蓮聖人（以下宗祖）の曼荼羅本尊の形態を示すものとして周知されているところである。その中に、波線部の「是の如き本尊は在世五十余年にこれ無し。八年の間、但だ八品に限る」という文言があるが、これは、一般的に考えれば、天台大師の五時教判に基づいて、あるいは無量義経の「四十余年未顕真実」の文に照らして、「この本尊は法華経説法以前の四十余年には明かされず、法華経説法の最後八ヶ年のうち本門八品に限って初めて明かされるのだ」と解することができる。しかし、釈尊の五十年一代説法の中に法華経の八ヶ年も

当然含まれるのであるから、その表現は「五十余年にこれ無し」ではなく、「四十余年にこれ無し」とするべきだという主張も論理的には成立するだろう。

例えば『日蓮聖人御遺文講義』（第三卷・宗要篇^①）には、この「五十余年」を次のように解釈している。

○五十余年、真蹟には『五十余年』とあり、諸本多くは『四十余年』に改む。五十余年といふは総じて一代を指したのである。尔前四十余年を主とするは、次の『八年』の語に照して明であるが、真蹟を改めるまでの必要もない。況んや『五十余年之れ無し』といふは、還つて『但だ八品に限る』を強める所以でもあるのである。

すなわち、ここに「五十余年」と言っているのは、実は「四十余年」のことであり、「但だ八品に限る」を強調する為の言い回しに過ぎない、と望月歆厚師は解釈している。

さらに『日蓮聖人遺文全集講義』（第十一卷下^②）では、「今は録内及遺文録による」として、本文そのものが「四十余年」に改められている。

このような解釈に対して異を唱えたのが荻谷日任師（一八八八—一九六二）であった。荻谷師は、宗祖が「五十余年」と書かねばならないから五十余年とお書きになった^③とし、四十余年ではなく、あくまでも五十余年としなければならない理由について、今日在世五十年の説法の外に久遠本地の在世五十年が存在することを提示した。すなわち「八年の間、但だ八品に限る」の八品は、単に法華經のうちの従地涌出品から囑累品までを指すのではなく、それは「久遠本地の本門八品」を指すのであって、したがってこの箇所は、本尊が、在世五十年には明かされず、久遠本地の本門八品に限って明かされることを示しているのであると主張したのである。^④

このように、今日在世五十年の法華經説法と久遠本地の法華經説法を相対的に捉える思想を、「本地迹中思

想」と呼ぶが、こうした表現は宗祖遺文の他の部分にも散見される。そこで今回は、主に『開目抄』の表現との比較を通じて、宗祖の本地迹中思想について考察し、日蓮思想の一端を明らかにしたいと思う。

二、『観心本尊抄』における「三箇の銘文」(荻谷日任説)

荻谷師は、『観心本尊抄』中に三箇所にわたって「五十余年」という記述が見えることに着目し、これを「三箇の銘文」と呼んだ。

その第一は、次の箇所である。

夫レ始メ自ニリ寂滅道場華藏世界ニ終ルマデ于沙羅林ニ五十余年之間華藏・密嚴・三變・四見等之三土四土ハ皆成劫之上ノ無常ノ土ニ所ニ変化スル方便・実報・寂光・安養・淨瑠璃・密嚴等也。能變ノ教主人ニリタマヘバ涅槃ニ所變ノ諸佛隨テ滅尽ス。土モ又以テ如シ是ノ。

〔定本遺文〕七二二頁

これは、直後に「今本時の娑婆世界は三災を離れ、四劫を出たる常住の浄土なり」と続く部分であり、ここで宗祖は、在世五十年の説法で説かれた浄土は全て無常の浄土であるが、久遠本地(本時)の娑婆世界は常住の浄土である、ということを示している。ここに見られる「五十余年」が法華經を含んでいることは「三變」という語が含まれていることから明らかである。つまり、宗祖は久遠本地の法華經にこそ真実の浄土が説かれるのであって、迹門である見宝塔品を中心とする今日在世の法華經には真実の浄土は説かれないことを示しているの

ある。

次の第二銘文は、前項で述べた「是の如き本尊は在世五十余年にこれ無し。八年の間、但だ八品に限る」の部分である。これについて先の『日蓮聖人御遺文講義』では次のように解釈している。

本節には、本尊の出現の時を明し、先づ佛在世に一度のみ顕れたるを説くのである。次に滅後、正像末に互つて、末法の始に始めて顕る、を説けば、本尊出現の時は二度に限るのである。（『日蓮聖人御遺文講義』第三卷二六九頁）

ここに「仏在世に一度のみ顕れた」と解釈することの根拠は、本尊の明かされなかった「在世五十余年」を、法華經の八ヶ年を含めない「在世四十余年」と理解した上で、本尊が明かされた本門八品を「在世の法華經說法」の本門八品と解釈していることにある。しかしながら、宗祖は「是の如き本尊は在世五十余年にこれ無し」と明言しているのであるから、純粹に宗祖の言葉に準ずる立場に立てば、やはり本尊は「仏在世」には明かされなかつたと解釈せざるを得まい。つまりこの本門八品は、——今日在世ではなく——久遠本地の法華經說法における本門八品ということになる。

続いて、第三銘文には次の箇所を上げている。

自_レ過去大通佛_ノ法華經_ノ乃至現在_ノ華嚴經_{乃至}迹門十四品・涅槃經等_ノ一代五十余年_ノ諸經_ノ十方三世諸佛_ノ微塵_ノ經々皆寿量_ノ序分也。

〔定本遺文〕七二四頁

これは「又本門に序正流通あり」に続く文であるが、これに先立つ「本門十四品の一經に序正流通あり」とす

るいわゆる本門三段とは異なり、法界三段と呼ばれる部分である。ここに示された五十余年は、在世の法華經を含む一代諸經であるのみならず、三世に亘る五十余年（諸仏同道）であると荻谷師は指摘している。すなわちこの場合の「本門」は「今日在世五十余年の本門」ではなく、「久遠本地の本門」正意の法華經と解するわけである。その立場から見れば、過去大通智勝佛の法華覆講より中間世々および今日在世の五十年説法、そして「十方三世諸仏の微塵の経々」という、時間的にも空間的にも全ての仏教の教えが序分となり、本地の本門寿命品が正宗分となるということになる。⁶⁾

ただし、この第三銘文では、「寿命の序分」として「迹門十四品」が上げられているのみで「本門十四品」は明示されていない。これは、第一銘文において迹門見宝塔品の「三変土田」を今日在世の法華經の示した浄土と理解したように、今日在世の法華經は迹門の法華經であって、本門を正意としていないという立場から、今日在世の法華經を「迹門十四品」として表現したものと考えることができる。

一方、単純に見れば「現在の華嚴經乃至迹門十四品」が「寿命の序分」なのであって、「本門十四品」は「一代五十余年の諸經」には含まれないという反論もなされるであろう。

三、『開目抄』に見られる本地迹中思想

さて、『観心本尊抄』中の「在世五十余年」に、今日在世の法華經説法が含まれるか否かという問題に関連して、『開目抄』（文永九年・真蹟曾存）の次の一文が注目できる。

日蓮案^ヲ云^ク二乗作仏すら猶^ホ尔前づよにをぼゆ。久遠実成は又なるべくもなき尔前づりなり。其の故は尔前法華相對するに猶^ホ尔前こわき（強）上、尔前のみならず迹門十四品一向に尔前に同ず。本門十四品も涌出・寿量の二品を除ては皆始成を存せり。双林最後^後大般涅槃經四十卷・其^ノ外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども応身報身の顕本はとかれず。いかんが広博の尔前・本迹・涅槃等の諸大乘經をばすて、但涌出・寿量の二品には付^クべき。

（『定本遺文』五五三頁）

ここで留意すべきは、宗祖が、「広博の尔前・本迹・涅槃等の諸大乘經をばすて、但涌出・寿量の二品には付^クべき」と、捨てるべき大乘教の中に「本迹」が示されていることである。当然^ニここには「本門」も含まれているのであり、「尔前・本迹・涅槃」とは、すなわち法華經八ヶ年を含む釈尊一代五時の説法の全てであることが分かる。それを捨てて「涌出・寿量」の二品につけという宗祖の主張（波線部）は、先述した『観心本尊抄』の「三箇の銘文」と同様に、釈尊一代五十年の説法とは別の法華經が存在していることを想起させるのである。つまり、『開目抄』のこの箇所は、『観心本尊抄』の「三箇の銘文」と同様の文脈で捉えることができるわけであるが、ここで、『観心本尊抄』の第二銘文にみられた「本門八品」ではなく、「涌出・寿量」の二品が重視されているのは、「涌出・寿量」の二品で説かれる仏身が久遠実成の釈迦牟尼仏であり、そこに三身の顕本が説かれている、ということがその根拠となっている（傍線部）。

そもそも、『開目抄』では、

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て尔前二種の失一つを脱れたり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せ

ざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮ぶるにいたり。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。尔前迹門の十界の因果を打ちやぶって、本門十界の因果をとき顕わす。これ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

〔定本遺文〕五五二頁

と、久遠実成が説かれる法華経の本門に至ってはじめて「真の一念三千」、すなわち成仏の因（種子）が開示されたことを主張している。そしてそれは、「本因本果の法門」であると言ひ、久遠本地（本時）における積尊の因行果徳の世界にこそ、真の一念三千が顕れるとしている。

ここで宗祖は、真の一念三千の顕現の条件として「発迹顕本」をあげているが（傍線部）、『開目抄』と同時期に撰述された『八宗違目鈔』（文永九年・真蹟存）では、まず冒頭に、『法華文句記』の

若_レ其_レ未_レ開_レ法_・報_ハ非_レ迹_ニ。若_シ顕_本已_レ本_・迹_各ノ三_{ナリ}

〔大正蔵〕三四卷、三三九頁、下段

の文と、『法華文句』の

佛_テ於_三三世_ニ等_シ有_三三身_ニ。於_テ諸_教ノ中_ニ秘_シテ之_ヲ不_レ伝_ハ

〔大正蔵〕三四卷、一二九頁、下段

『親心本尊抄』三箇銘文説と『開目抄』との関係について

の文を引き、久遠実成を示して発迹顕本が説かれる法華經本門においてのみ、仏に法身、報身、応身の三身具足が成立することを示している。

また『八宗違目鈔』には、三因仏性について次のように述べている。

文句ノ十二云ク正因仏性ハ法身ノ通ニ亘ス本當ニ。縁了仏性ハ種子本有ニシテ非ザル適フニ今ニ也。

〔定本遺文〕五二五頁

宗祖は、ここに、『法華文句』を引いて、正因、縁因、了因の三因仏性が、三世に亘って、本来的に衆生に具されていることを示し、それが説かれているのは法華經だけであることを述べている。そして、この文を引用した後、華嚴宗や真言宗に一念三千義が存在するのかという問答に入っていくのであるが、この文脈から、一念三千こそが三因仏性、すなわち成仏の因そのものであるという宗祖の主張を看取できる。

さらに『開目抄』には、天台の種熟脱三益論を論じる中で、仏種子について次のように述べている。

法華經の種に依て天親菩薩種子無上を立たり。天台の一念三千これなり。華嚴經乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子皆一念三千なり。天台智者大師一人此法門を得給えり。

〔定本遺文〕五七九頁

ここでは、世親の『法華論』⁸⁾において無上と説かれた「種子」こそが、天台教学で言うところの一念三千であるとし、諸仏の種子もまた全て一念三千であるとしている。

また、

又仏になる道は、華嚴唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪觀等も実には叶^レべしともみへず。但^テ天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。此、一念三千も我等一分の慧解もなし。而^レども一代経々の中には此^ノ経計^リ一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉にたる黄石なり。沙をしぼるに油なし。(中略) 諸経は智者猶^レ仏にならず。此^ノ経は愚人^モ仏因を種^ニま^スべし。不^レレ^テ求^メ解脱^ヲ解脱^自ラ至^ル等云云。

(『定本遺文』六〇四頁)

と述べ、一念三千が成仏の因たる種子、すなわち仏性であることを論じている。ここでは、一往、一念三千の理を悟ることは凡夫の身には不可能であることを示しつつ、しかしその一念三千が説かれているのは法華經のみであり、一念三千觀法の適わない愚人であつても、成仏の因たる一念三千仏種が種えられ、自然に悟りを得ることができるといふことを強調している。

このように、佐渡流罪当初の『八宗違目鈔』と『開目抄』とに共通する大きな主題の一つとして、成仏の種子たる「真の一念三千」を明らかにするといふことがあつたのであり、そのような文脈の中で「本迹」を捨てよと主張したことを考えれば、宗祖は、今日在世五十余年の法華經を、「成仏の因たる一念三千を明かす久遠実成」を正意としない「広博の」法華經と見たのだと捉へることができよう。そしてそのことは、『観心本尊抄』の第三銘文において、「迹門十四品」として表現されたものと『開目抄』の「広博の法華經」とが同義であることを示すものと言へるのではなからうか。

四、結びにかえて（寿量一品二半正意と本門八品正意）

ところで、『開目抄』においては、従地涌出品と如来寿量品の二品を重要視しながら、『観心本尊抄』の第二銘文では本門八品を重視し、そこに顕された世界を久遠本地として、それに基づいて本尊が建立された。この『開目抄』と『観心本尊抄』との相違は如何なる観点の相違によるものなのであろうか。

そもそも、『開目抄』における涌出・寿量の二品を重視する姿勢は、「本門十四品も涌出・寿量の二品を除けては皆始成を存せり」ということに起因しており、それは、涌出・寿量の二品のみが始成正覚の仏を説かず、純粹に久遠本仏のことを主題として説かれた部分であるということの意味していた。天台大師智顛による本門の序・正・流通の三段分科によれば、本門の正宗分は従地涌出品の後半と、如来寿量品、そして分別功德品の前半の、いわゆる「一品二半」と呼ばれる部分であるとされるが、『開目抄』に言う涌出・寿量の二品の重視は、久遠本仏を説き明かす、本門正宗分の重視であつたと考えて良いであらう。これはすなわち成仏の因たる一念三千を顕すことを主眼とした結果であり、またそれは『観心本尊抄』第三銘文の「寿量」を正宗とする見方と軌を一にするものであると言えよう。

これに對して、『観心本尊抄』第二銘文の本門八品重視の姿勢は、本門の肝心たる題目「南無妙法蓮華經の「下種」についての文脈で語られたものであつた。このことから考えると、『開目抄』が三身具足の久遠本仏の開顯「一念三千仏種」に立脚したものであつたのに對し、『観心本尊抄』第二銘文は付嘱の法の何たるかに立脚したものであつたと言える。そして、末法下種の担い手として本化地涌菩薩の活動を重視した結果として、それが説

かれる本門八品の重視に至ったのは当然の結果であつたと言えよう。

宗祖は『曾谷殿御返事』（弘安二年・真蹟欠）に、

諸経は五味、法華経は五味の主と申ス法門は本門の法門也。

（定本遺文）一六五五頁

と述べておられる。これに関連して、日隆上人はその主著『本門弘経抄』に、

本門ト云迹中之本ナル之本ナル故ニ以ニ一品ニ半計リ為ス一部ノ主ト間 唯ダ迹門ノ撰属也。此レ上ニ五味主ト過去常ト根
本一乗ノ法華経有レ之レ。依レ此ニ立ツ日蓮宗ヲ。此ノ本地一妙ノ五味主ヨリ従本垂迹スル垂迹ノ五味五時有レ之レ。依レ此ニ
立ツチリ八宗等ノ諸宗一云。

（『法華宗本門弘経抄』第五卷・二四頁）

とし、日蓮思想の根幹に本地迹中思想のあることを示されている。荻谷師の三箇銘文説はこうした日隆上人の説を『観心本尊抄』の中に見出したものとして注目できるが、それは『開目抄』においても可能であると言えるのではなからうか。

註

（1）望月敏厚・一九三三年（日蓮聖人遺文研究会発行・一九五七年復刻版、二二六九頁）

『観心本尊抄』三箇銘文説と『開目抄』との関係について

(2) 清水龍山・一九四一年(ピタカ刊・一九七八年復刻版、三〇二頁)

(3) 荻谷日任「本尊鈔三処四但(五但)の銘文」(『桂林学叢』第二号・一四四頁)法華宗桂林同学会・一九六一年)

(4) 荻谷師のこうした考え方は、日隆上人(慶林坊・一三八五〜一四六四)の説に基づくものである。

(5) 「三箇の銘文」については、『観心本尊鈔講義』(株橋日涌著・法華宗〈本門流〉宗務院刊・一九八一年・下巻・六〇六頁)参照。

(6) 『日蓮聖人御遺文講義』(第三巻・二九二頁)によれば、この「本門」は「文底の本門」であり「観心の本門」であると解釈している。これは日蓮宗において一般的な解釈ではあるが、この三箇銘文説より見れば、この三段分科は大通智勝仏より今日釈尊に到るまで、広く三世十方に亘る釈尊の衆生教化という立場から見た三段分科なのであって、それはあくまでも教相に依ったものであり、一念三千の観心の側面を強調した解釈ではないということになる。

(7) 『大正蔵』三四巻、一四〇頁、下段

(8) 『大正蔵』二六巻、九頁、中段

(9) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』(日蓮大聖人御降誕奉讃会刊・一九七〇年復刻版)。

〈キーワード〉 三箇の銘文 本迹論 五味主 『八宗違目鈔』 『曾谷殿御返事』